

## アナンシと五

(7分)

むかーし：あったとき

あるところにアナンシという化け物がいたそうだ：

アナンシはいつもお腹をすかしていた

アナンシの近くに五：という名前の魔女が住んでいた：魔女は自分の五：という名前が大嫌いでもっといい名前で呼んでもらいたいと思っているのに みんなはやっぱり五：というもんだから 五はいつも腹を立てていた：

1

ある朝 アナンシが魔女の家をのぞいてみると家の中では魔女が大なべで魔法の草を煮ているところだった：なべから煙があがりだすと魔女は魔法の杖を振り上げて恐ろしい呪文を唱えたのだった：

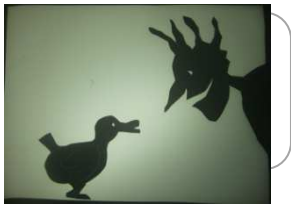
「五という言葉を唱えたものはその場で死んでしまえ：その場に倒れそれを聞いてアナンシはニヤツと笑った：

「いい事を聞いた：これでご馳走にありつけるぞ」

次の朝 アナンシは道端にサツマイモの山を五つ作って 誰かが通るのを待っていた：

そこへアヒルの奥さんが通りかかった：

2



「おはよう アヒルの奥さん ごきげんいかがですか」

「ありがとうアナンシさん おかげさまで：あなたは？」

「ええ：それがねえ：」アナンシは 悲しそうな顔でいった：

「ご覧の通りサツマイモを作ったんですがね：頭がわるいもんでい  
く山とれたか 数えられないんですよ：すみませんが 数えてみてくれ  
ませんか」

「いいですとも」アヒルの奥さんはサツマイモの山を数え始めた：  
こんな風に：

「一：二：三：四：五：」

五：といったとたん アヒルの奥さんは魔女の呪いにかかって バツ  
タリ倒れて死んでしまった：

3

アナンシはアヒルの奥さんを丸ごとペ□リと食べてしまった：

そしてまた 道端に座って誰かが通るのを待っていた：

そこへ ウサギの奥さんが長い耳をパタパタさせながら通りかかった

：

「おはよう ウサギの奥さん ごきげんいかがですか」

「ありがとうアナンシさん おかげさまで：あなたは？」

「ええ：それがねえ：ご覧の通りサツマイモを作ったんですがね：頭  
がわるいもんで いく山とれたか 数えられないんですよ：すみません  
が 数えてみてくれませんか」

「いいですとも」

4

ウサギの奥さんはサツマイモの山を数え始めた：こんな風に：

「一：二：三：四：五」

五といったとたん ウサギの奥さんは バツタリ倒れて死んでしまっ

た：

アナンシはウサギの奥さんを丸ごとペロリと食べてしまった：

アナンシはふくれたお腹をさすりながら まだそこにいた：

そこへ ハトの奥さんがきれいなピンクの足で歩きながら通りかかっ

た：

「おはよう ハトの奥さん ごきげんいかがですか」

「ありがとうアナンシさん：ごきげんいかが？」

5

「ええ：それがねえ：ご覧の通りサツマイモを作ったんですがね：頭  
がわるいもんで いく山とれたか 数えられないんですよ：すみません  
が 数えてみてくださいませんか」

「ええ いいですとも」

ハトの奥さんはサツマイモの山に飛び乗った：そして山から山へ飛び  
移りながら数え始めた：こんな風に：

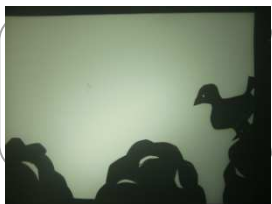
「一：二：三：四：それからわたしの乗っている分」

「えーっ？」アナンシは驚き がっかりした

「ハトの奥さん：あんたの数え方はおかしいですよ：」

「まあ ごめんなさいアナンシさん それじゃもう一回：」

6



ハトの奥さんはまた数え直した

「一：二：三：四：それからわたしの踏んでいる分」

「違う違う：そんな数え方じゃだめだー：」

「ほんとうに ごめんなさいアナンシさん 今度こそもう一回：」

ハトの奥さんはまた数え直した

「一：二：三：四：それからわたしの座っている分」

アナンシは真っ赤になっておこった：そして思わずこういった：

「なんてばかなハトだ なんて間抜けなハトだ こうやって数えるも

んだ：一：二：三：四：五」

五といったとたん アナンシはバツタリ倒れて死んでしまいましたと

さ：

7

いっちゃんぼーんさけた

おしまい

《参考資料》

『子どもに聞かせる世界の民話』 矢崎源九郎・編 実業之日本社《

8